
コスギ・コミュニティビジョン2040

～2040年の武蔵小杉駅周辺地域が目指すコミュニティ形成の実現に向けて～

(概要版)

平成 28 年 3 月

武蔵小杉駅周辺地域連携推進会議

－ 目 次 －

1	「コスギ・コミュニティビジョン2040」とは.....	1
	(1)「コスギ・コミュニティビジョン2040」を策定する趣旨・目的.....	1
	(2)「コスギ・コミュニティビジョン2040」の構成.....	1
2	「コスギ・コミュニティビジョン2040」の概要.....	2
	I コスギ・コミュニティビジョン2040の主題と構成.....	2
	II 都市・人口構造の現在と長期予測.....	4
	III 希望のシナリオ ver1.0	5
	IV アクシヨンプログラム.....	10

1 「コスギ・コミュニティビジョン2040」とは

(1) 「コスギ・コミュニティビジョン2040」を策定する趣旨・目的

武蔵小杉駅周辺地域では、近年、大規模な再開発が進行しており、タワーマンションをはじめ、大型商業施設などが相次いで建設されています。これらの変化に伴い、本地域では、都市としての利便性や開発に対する期待感などから、若い世代を中心とした大幅な人口の流入と集中が進んでいます。

しかし、再開発での成長による「輝く都市」という側面を持つ一方で、タワーマンションが建ち並び、商業施設やオフィスが集積するなど、高密度の都市社会である本地域においては、将来的に様々な課題が出てくることも考えられます。

そのため、本地域では、地域の各主体が連携しながら、長期的な視点で「持続可能な都市」を理念とするまちづくりを進めていくことが必要となっています。

このような状況を踏まえて、武蔵小杉駅周辺地域が将来目指すコミュニティの姿を描きながら、その実現に向けて取組を推進するための方針として「コスギ・コミュニティビジョン2040」を策定しました。

(2) 「コスギ・コミュニティビジョン2040」の構成

コスギ・コミュニティビジョン2040は4章で構成しています。

〔Ⅰ コスギ・コミュニティビジョン2040の主題と構成〕では、ビジョンの全体像を示しています。まず、ビジョン全体に関わる考え方や将来目指すべきコミュニティの姿について示した上で、それを目指していくために、どのようなことが必要であるかを示しています。

〔Ⅱ 都市・人口構造の現在と長期予測〕は、再開発によって大きく変わりつつあるまちの姿を踏まえ、開発によってもたらされる活気や活力などの「光」の部分と、その裏側で発生する様々な都市問題などの「影」の部分について、現時点での長期的な予測を示しています。

〔Ⅲ 希望のシナリオ ver.1.0〕は、ⅠとⅡを踏まえて、25年後のまちのコミュニティの姿を、1人のジャーナリストがこの地域を訪れ、描写した日常風景のルポルタージュという形で表現することで、望ましいまちの将来像を示しています。

最後に〔Ⅳ アクションプログラム〕は、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを踏まえ、将来像の実現に向けて現在から取り組んでいくプロジェクトの概要を示しています。

2 「コスギ・コミュニティビジョン2040」の概要

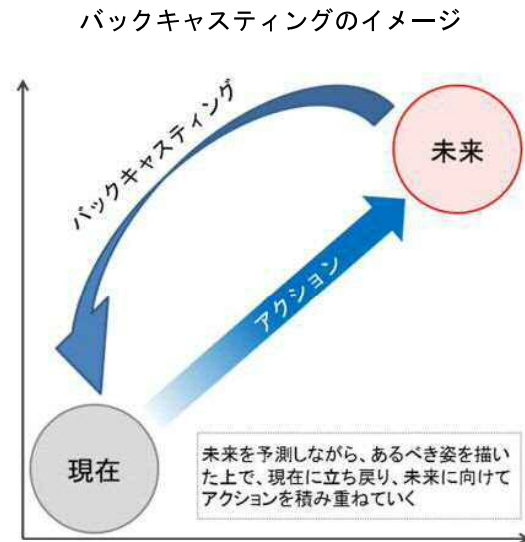
I コスギ・コミュニティビジョン2040の主題と構成

I-1. 希望のシナリオからのバックカスティング

このビジョンにおいて、将来に向けたまちづくりを考える上では、「バックカスティング」という考え方を用いています。

「バックカスティング」とは、未来を予測しながら、望ましい将来像を描いた上で、2016年の現在に立ち戻り、課題を確認しながらアクションを積み重ねていくという手法です。

そのため、このビジョンでは、将来の時点として定めた2040年時点の地域の望ましい将来像を「希望のシナリオ」として描き、その実現に向けて行政や地域が積み重ねていくべきアクションを考えていきます。



I-2. 持続可能なコミュニティ

「希望のシナリオ」から現在に立ち戻ってまちづくりを進めるためには、市民や事業者・団体をはじめとする武蔵小杉駅周辺地域の多様な主体が合意形成しながら連携して課題に取り組む（協働する）ことが重要となります。

そこで、協働による地域課題への取組を積極的に進めることで、ネットワークがつくられると同時に地域課題への対応能力が高まって新たな取組につながり、更に、関係者間の信頼が醸成されていくという循環を目指します。

こうした、地域自身が協働しながら課題を解決していける「持続可能なコミュニティ」をつくっていくことが、「希望のシナリオ」で描かれる「持続可能な都市」につながっていくと考えられます。

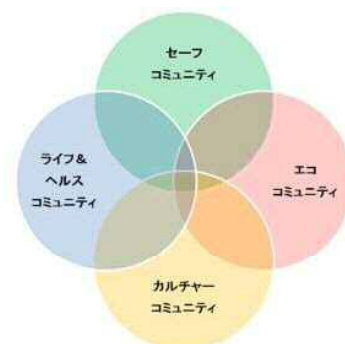
I-3. 戦略的テーマとアクションプログラム

(1) 戦略的テーマ

ビジョンでは、「持続可能な都市」を目指す取組を進めていく上で、重要性の高いテーマとして4領域の「戦略的テーマ」を設定しています。

戦略的テーマは①エココミュニティ（環境）、②セーフコミュニティ（安全・安心）、③カルチャーコミュニティ（文化）、④ライフ＆ヘルスコミュニティ（健康）であり、「持続可能な都市」を目指す上でも、このテーマに沿っ

4 領域の戦略的テーマ



た取組が中心となります。

（２）アクションプログラムの構成

ビジョンでは、戦略的テーマに基づき、まず、5年程度で具体的な実践を予定している複数のプロジェクトを「アクションプログラム」として取りまとめています。

アクションプログラムでは、行政が中心となって進めていくものや、地域が中心となり、行政が連携し支援をしていくものなどに分かれている他、公園や公開空地など、まちの中で人々が集い協働により管理する場所（都市コモンズ）に関する取組を重視しています。

また、地域が協働で行う課題解決事業とその運営方法（エリアマネジメント）について、各地の先行ケースの応用や、新たな手法の開発を模索していくことも必要です。

I-4. コミュニティガバナンス

本ビジョンにおいて、武蔵小杉駅周辺地域のコミュニティにおける自治を、区役所を中心とした川崎市政と合わせて「コミュニティガバナンス」と呼んでいます。コミュニティガバナンスには様々な視点がありますが、まずは、町内会・自治会やマンションにおける地域の自治の課題に対して優先的に取り組む必要があります。

町内会・自治会とタワーマンションにおけるコミュニティガバナンスの視点



町内会・自治会においては、役員の担い手不足と高齢化が進行し、行政が依頼する事務による負担が過剰になっているケースが増加しています。したがって、地域への負担の状況を整理しながら、行政との関係を再構築していくことが望まれます。

一方で、マンションにおいては分譲の場合、マンションを所有している人による、ハード面の管理を中心とした「所有者自治」と、マンションに住んでいる人による、様々な課題への対応を行う「居住者自治」という視点に分かれており、タワーマンションの将来的な課題に対応していくためには、この二つの側面から自治力を高めていくことが望まれます。

I-5. 社会的責任の共有と分担

急速に成長する本地域が「持続可能な都市」を目指していくためには、関係する全ての主体が地域に対する社会的責任を共有し分担することが必要です。

行政にはもちろん、地域に対する政策責任がありますが、住んでいる人には、「市民」としての責任があり、また、ディベロッパー、商業事業者、地域企業には、それぞれ事業者としての社会的責任（CSR）が求められます。行政のみならず、本地域にかかわる全ての主体がそれぞれ「持続可能な都市」を目指す上での基本的な考え方や原則（コスギコード）を共有し、協働の当事者として取り組んでいくことが、2040年の希望のシナリオを実現していくうえで重要です。

Ⅱ 都市・人口構造の現在と長期予測

武蔵小杉駅周辺地域の 2040 年におけるあるべき姿である「希望のシナリオ」を導く前提として、本地域の都市・人口構造の特徴と 5 つの視点からの長期的な予測を提示します。

（１）都市構造

①都市形成上の特徴

本地域の再開発は、「川崎都市計画都市再開発の方針」に基づく、企業跡地や既成市街地における民間による個別開発や法定再開発によって、周辺の低層住宅地域なども巻き込みながら進められている開発であることが特徴として挙げられます。

②都市構造上の特徴

構造上の特徴として、本地域は大きく 3 つのゾーンに分けられます。

1. 企業の超高層業務ビルが立地する「企業立地ゾーン」
2. 既に開発が終了しており、タワーマンションと大型商業施設が立地する「中央ゾーン」
3. 市街地再開発が行われており、今後更に既成市街地に隣接して開発が予定されている「西側ゾーン」

（２）人口構造

統計データから、本地域の人口増加は、概ねタワーマンションの開発によるものであり、15 年前の 20～30 代から 30～40 代へと人口の中心が移っています。

また、世帯構成として夫婦のみ、夫婦と子からなる世帯が増えていますが、それ以上に既成市街地の（賃貸）マンション居住者と想定される単身世帯数が増加しています。

（３）5 つの視点から見た光と影のシナリオ

①都市空間（環境・住まい・災害の視点）

再開発に伴い、まちの賑わいが増える一方で、環境問題や災害時のリスクが高まることが想定されます。災害時にも地域が連携し、復旧に向けた対策がスムーズに行われることが重要です。

②ライフスタイル（健康福祉・高齢者・子どもの視点）

タワーマンションの高齢者や子育て世代が孤立することも懸念されるため、子どもから高齢者まで、多世代がつながる暮らし方がライフスタイルとして浸透していくことが望まれます。

③地域のブランド性（市民文化・消費文化・都市文化）

地域に根差した商店街や旧来の市民文化の衰退などにより、地域の魅力やブランド価値の低下が懸念されるため、消費文化の多様性の確保や市民文化の創発・継承により、個性的な都市文化が醸成されていくことが期待されます。

④コミュニティガバナンス（マンション管理組合と町内会・自治会の関係性の視点）

再開発エリアにおけるマンションの所有者のガバナンスが機能しなくなることが最大のリスクであり、マンション居住者や町内会など、多様な主体が連携しながら課題に取り組むことが望まれます。

⑤都市コモンズ

荒れた公園や公開空地などの空間は、事故や犯罪の発生源になりうるため、こうした都市コモンズが地域の共有財として適切に維持され、コミュニティを生み出す「鍵」となることが望まれます。

Ⅲ 希望のシナリオ ver1.0

《2040年のある屋下がり、武蔵小杉駅に降り立った。このまちで見たのは・・・》

☆全国から注目される「こすぎライフ」☆

駅近にタワーマンションの立ち並ぶ姿が、武蔵小杉を象徴する風景だ。交通便利性が高いだけでなく、この地域での暮らし方は、都市居住者の多くが憧れる「こすぎライフ」との評判が浸透して、もう10年は経つだろうか。この地域は再開発当初から、都市型コミュニティの形成に積極的に取り組んできたところで全国に名を馳せている。それぞれのタワーマンションのマンション管理組合は、25年の間に所有者の変更もあったが、安定した運営への継続的な取組によって、この10年ぐらいで当たり前の言葉になった「所有者自治」の文化が形成され機能しているという。またマンション間のネットワークも形成され、情報交換や地域の共通課題への取組についても共通理解があるそうだ。更に、所有者自治のマンション管理組合だけではなく、賃貸人を含めた、いわゆる「居住者自治」の組織も作られ、戸建住宅地域の住民自治組織や市民活動団体とも連携・協力を図りながら、住環境を維持・向上させている地域であり、各地からの視察が後を絶たないという。NPOの代表を務めるこの地域のキーパーソンにインタビューしたところ、先人から引き継いできた長年にわたる取組の成果について自信をもって語ってくれた。



武蔵小杉の利便性から、共働きのファミリー世帯も多いため、今夜はマンションに暮らすワーキングマザーが子育てなどを語り合う集いが開かれるとのことで、その取材に訪れた。30年近くの実績があるこの会は、地域の市民活動の担い手を数多く輩出するだけでなく、子育てがひと段落して地域で起業する人も目立ってきており、地域のゆるやかなつながりをつくる場として注目が集まっている。会が始まるまで、周辺地域を散策してみよう。

☆世代をつなぐまちの都市コモンズ☆

駅からタワーマンションが林立する空間を通り抜け、歩いて数分のところにある大型商業施設に入ると、乳児を連れた親たちと高齢者たちが混ざり合っ、おしゃべりを楽しんでいる空間がある。他ではなかなかお目にかかれない暖かな雰囲気を醸し出している。店員に尋ねると、ここは川崎市内で採れた野菜や果物を使って、ランチやスイーツを提供しているお店で、30年前にこの地域に移り住んできたご夫婦が、地元の人たちが集える空間を作りたいということで、定年退職より少し早くリタイアして、開業したという。現役時代は、駅近のタワーマンションに暮らしていたが、現在は娘夫婦に譲り、多摩川近くの低層マンションで生活している。2世代で「こすぎライフ」を満喫しているファミリーである。



ちなみにこのお店、夜は店主が代わり、バーとして営業を行っている。店は共同経営スタイル、パーティーやホールは、料理人としての起業やアーティストとしての成功を目指す若者たちで、小杉育ちの青年の呼びかけでこの地に集まって暮らしているそうだ。日曜日の晩には、ジャズの生演奏も聴ける。ハードもソフトも洒落た作りの都市コモンズなのである。

ここで待ち合わせた案内役の中原区役所職員は、武蔵小杉では CSR の一環としての地域への貢献が、「コスギコード」というかたちで大型商業施設のみならず広く事業者に定着しており、行政や市民、NPO も創造的なまちづくりのパートナーを見つけやすい環境が整っていると、説明してくれた。

☆コミュニティで立ち上げた「こすぎの2大祭り」☆

静かな BGM が流れる店内でコーヒーを飲みながら、穏やかな表情で子どもたちを見守っていた初老の男性が、こうした地域の人々のゆるやかなつながりが広がり始めたきっかけは、駅前のこすぎコアパークで 20 年以上も前に始まった「こすぎ夏祭」にあると話してくれた。彼は、この地域で再開発が始まった当初に転入してきたマンション住民で、マンション管理組合の役員になったことから、地域の活動に関わり始めたという。子育てをする中で自分が幼少期に経験したような、子どもたちにこすぎの街をふるさとだと感じられるような機会を作っていきたいとの思いを持ち、同じような思いを持った仲間たちと、いくつものマンション管理組合に呼びかけて秋に開催する「コスギフェスタ」という新たな祭りを立ち上げたい。それが年々規模を拡大する中で、こうした動きに興味を持った戸建住宅地域の町内会・自治会長たちから、この地で行われてきた夏祭りが存続危機にあるという話を聞き、盆踊りや太鼓の音がある夏祭りを子どもたちのために一緒になって続けようという動きにつながったそうだ。それぞれの祭りで趣は異なるが、今では「こすぎの2大祭り」としてこの地域にすっかり根づき、かつてこの地で子ども時代を過ごし、仕事の都合で今はこの地を離れてしまった人々が、この時期は子連れで戻り郷愁を感じる機会にもなっているという。まるで、ふるさとを離れても村祭りには帰ってくるのと同じ感覚だ。



☆企業も熱心な芸術文化・スポーツの活動☆

5 年ほど前には、駅前の商業施設の改装に伴って、新たに小劇場と稽古場がオープンし、舞踊家や演劇人たちも集まってくるようになった。コスギフェスタでは、和洋問わず、様々なジャンルのグループがパフォーマンスを披露しており、その中から稽古場や常設で活動発表のできる場を求める声が高まってきた。それに応えたのが、地域に根ざした中小企業の経営者たちだった。全国展開の商業施設に場の提供を求め、開業の資金繰りに奔走した彼らの思いは「コスギからアーティストが育つ」ことで一致したようだ。



芸術・文化活動の支援など、自分たちのまちを誇れるような魅力づくりに貢献することは、地場の企業人にとっては市民感覚に根ざした CSR であり、結果的に地域経済の活力と本業の発展につながっていくという意識が、今では当たり前のように浸透しているという。こうした意識から、近隣商店街でも、街

角の賑わいを維持するためには地域に支持されるための努力を惜しまず、市民活動の展示スペースや活動拠点などをつくったり、また街角のフラワーポットや緑化など、景観面も含めて公共空間としての魅力づくりに、組合としての方針を立てて積極的に取り組んでいるようだ。歩いてみると確かに、彼らの志が伝わってくる商店街で、気概ある店主たちから影響を受けた出店希望者が絶えず、このまちでチャレンジしたいとの意欲を語る若い世代や会社をリタイアした世代もよくやってくるらしい。

企業がかかわる地域活動といえば、地元の大企業がバレーボールやサッカーのチームを持つこともあって、長年にわたり子ども向けの教室も頻繁に開催されてきた。等々力緑地があることから中原区は、エリア全域で、子どもから高齢者まで、健常者も障がい者も、そして地域の外国人も含めたユニバーサルなスポーツのまちづくりを進めてきた。その中で高密度な都市空間のこの地域は、健康で自己実現が図れる状態であるウェルビーイング (well being) を理想とするスポーツコミュニティづくりが特色として打ち出され、行政、企業、学校、NPO などの協働によって、20 年以上も前から取り組まれてきたという。

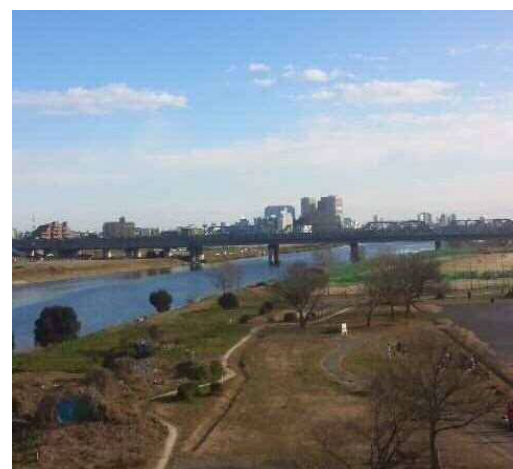


☆環境への高い関心と保全活動の広がり☆

駅から少し離れた戸建住宅地域に足を運んでみると、二ヶ領用水沿いの緑や渋川の親水護岸など、地域資源が豊かで、環境保全に多数の市民が参加している。日常的には、高齢世代の生きがい活動が中心だが、休日には中学生や親子連れが清掃活動や力仕事を手伝う姿があちこちで見られると、商店街の書店主が教えてくれた。少し足を伸ばせば多摩川の自然にも触れることができ、そのような環境資源の必要性を身近で感じることができるためか、ヒートアイランド現象や風害など、暮らしに直結する環境問題への取組も活発な地域であって、小学校から高校まで地域の学校教育との連携も盛んらしい。



こうした影響が顕著な再開発エリアを中心に、住民自らが地域の環境情報を収集した「こすぎ環境年鑑」を発行しているので、この書店で書籍版を購入した。電子版はどこにいても手に入るが、書籍版は地元の書店でしか手に入らないプレミアム付きである。それは、この地域で地産地消や食品残渣の削減など食を通したエコロジカルなライフスタイルや消費文化を創ろうと立ち上がった飲食店のグループが、季節限定の特別メニューを提供してくれる特典であり、食通だけではなく、賛同する市民からも共感の声や様々なアイデアが地域のメディアに寄せられるという。



☆ゆるやかなつながりで安心のまち☆

環境活動以外にもこの地域では地域活動に積極的に参加する高齢者が多く、近隣を中心に助け合いの関係も成立している。また、医療機関や公的機関を核にして、在宅介護を支える体制も整っているだけでなく、営利・非営利を問わず民間で多様な生活支援サービスがあり、高齢の単身者や夫婦のみの世帯でも加齢に伴う身体能力の低下を補いながら、生活の質を維持することができるので、住み慣れた地域で安心して暮し続けることができるという評価が定着した地域である。



20年前ぐらいからこの地域でも、少しずつ顕在化し始めた低層住宅地域の空き家問題も、立地条件の良さに助けられて、リフォームによる若い世代への住み替えや、カフェやレストランの出店、ミニ・コミュニティ施設としての活用が進み、子どもや高齢者、障がい者、外国人など様々な人々を包み込んでくれるようなコミュニティ形成のメカニズムが働くことでほぼ解消されているという。老朽化した個人住宅や集合住宅を再生させながら、低層住宅地域にも様々な都市コモンズや、いわゆるサードプレイス（住む場所と働く場所に対して、人々にとって大切な第三の居場所）を生み出していくような取組が順調に進んだ背景には、区役所や事業者だけではなく、まちの加齢と変遷を考慮しながら、多様な主体をコーディネートする専門家が加わった NPO があることが大きな理由のようだ。

この NPO で活動する専門家に話を聞くと、最近では、オートロックで仕切られたタワーマンションの空き室問題が目立ち始めており、マンション管理組合や町内会・自治会と相談しながら挑戦していきたいという。これまで築いてきたコミュニティの力の真価が問われるということなのだろう。

ところで、10 年前、首都圏にも大きな被害をもたらしたあの大地震の際に、公共交通機関がストップして駅周辺にも帰宅困難者が溢れたが、タワーマンションや中高層住宅の住民と地域団体との連携で、駅や大型商業施設などの事業者の協力も得ながら、自主防災組織などで運営される避難所を使ってスムーズに対応が図られた。コミュニティ FM によるタイムリーできめ細かな地域情報の提供もその一役を担ったそうだ。武蔵小杉ではよく使われる「持続可能なコミュニティ」の成果によって、まさに地域の人々の社会生活に関する強靱性、復元性（レジリエンス）が発揮されたといえるが、その時の経験は、その後のまちづくりに活かされ、今も、災害に強いまちづくりへの様々な取組が続いているという。



☆市民が創発した「コスギカルチャー」☆

市民の間で知性をはぐくむ文化活動が盛んなことも、この地域の特徴である。地元が大好きな人々が集い、子どもから大人まで自由に広く楽しく学んでつながる“学び舎”（こすぎの大学）の黎明期から 30 年が経って、「こすぎの地域学」は多くの市民の知的財産になった。しかも、これまで、多くの NPO や起業家など地域のイノベーターを輩出し、彼らはこの地域で活動の場を求め、今や、同様の学び舎は川崎市内全体や近隣の市にも広がり、市民大学のネットワークまで出てきている。ネットで検索すると、こすぎの大学の来月のテーマは、「コスギカルチャーを築いた人々へ回顧と展望」とある。この 30 年で

地域文化を回顧するほどの時が流れたことに興味を覚える。開催日時を確認し、早速、手帳にスケジュールを書き込んだ。

武蔵小杉駅の周辺は、昔から、市民文化の拠点として図書館や市民館、生涯学習プラザといった公共施設も充実し、かわさき市民アカデミーのような半世紀以上の歴史を持つ公民協働の市民大学の活動も続いている。市民アカデミーに立ち寄ると、日中ということもあるが、おそらく、タワーマンションに住むアクティブシニアたちが出てきて、講師役と思われるアーティスト風の若者をカフェに誘っていた。武蔵小杉のコミュニティを支えているのは市民文化であり、30年の間に、多くの人々の学ぶ意欲を引き出す何かがこのまちで培われてきたことは、何となく理解できるような気がする。



★コミュニティガバナンスのプラットフォーム★

今日の夕方、区役所最上階の広いホールで、多様な関係者たちが集う地域のプラットフォームの会議があるらしい。まだ午後3時だが、事務局を担うNPOの活動拠点が区役所内に置かれているというので覗いてみた。4名のスタッフと2名のインターンシップの大学生が準備に追われ、事務局長が少しの時間だけということで応対してくれた。この地域の重要課題は、プラットフォームのメンバーでとにかく共有し、対応策やそれぞれの役割についても議論しながら、都市型コミュニティともいえる様々なネットワークを通して地域全体に情報を発信し、必要に応じて区役所の関係部署との協働を図り、オールコスギによる解決への道筋を探っているそうだ。そして、この地域が25年前から提唱してきたコミュニティイノベーションは、こうした実践の積み重ねで成熟した地域の「自治の文化」とそれに呼応する行政の力量が鍵を握っているとも語ってくれた。



事業者の協力もあって、来年には近隣に独立したNPOのオフィスを構えるという。そこからまた新たなイノベーションを模索しようとしていることは聞かなくても明らかだ。

《…四半世紀前に想い描かれた風景》

夜、ワーキングマザーの会合に顔を出してから、そこで薦められた若いシェフが最近開業したカジュアルなイタリアンのレストランで夕食をとる。住民や勤め帰りの会社員が新しい店の様子を伺うかのように席を埋めていた。こうして地域のサードプレイスになることで、オープンキッチンの向こうにいる若いシェフも育てられ、コスギカルチャーの担い手になっていくのだろう。成熟期に入ったこのまちが次の世代を引き寄せ抱擁することで、都市の生命も続いていく。四半世紀前の人々は、まちが急速に成長し変貌する日々の中で、快適さを享受しながら、しかしどこかで、このまちは一体どこに向かうのだろうかという不安を抱えながら、この店のような光景や今日一日見てきた武蔵小杉の日常風景を、将来の姿として想い描いていたのかも知れない。

《to be continued…》

Ⅳ アクションプログラム

アクションプログラムには、4 領域にわたるまちづくりの戦略的テーマとその基盤に関わるコミュニティガバナンスのプロジェクトをまとめています。

Ⅳ-1. リーディングプロジェクト

リーディングプロジェクトは、本地域の課題解決を目的としたコミュニティ形成に向けて、2016～2020 年の 5 か年で行政が主体となって先導的に取り組んでいくプロジェクトです。

(1) 市内連携によるリーディングプロジェクト

【地域活動コンシェルジュプロジェクト（高齢者・情報提供）】

本プロジェクトは、本地域で地域活動に関する相談・紹介を行っている窓口がコンシェルジュとして、地域活動などを始めたい人に対して、活動団体などの情報を提供していくものです。



【小杉駅周辺地域の避難所運営を考えるプロジェクト（防災・主体間の連携促進）】

本プロジェクトは、中原区の特徴としての町内会・自治会とタワーマンションが混在して構成される避難所運営会議の体制・運営手法の構築を行うことで、居住者の関心が高い防災をテーマとしたコミュニティ形成を促進していくものです。



【子育て情報発信実証事業プロジェクト（子育て・情報提供）】

本プロジェクトは、特にタワーマンションに多い子育て世代の居住者に対して、子育てに関する情報を、ICTを活用して提供していくものです。発信する情報は、区役所の関係部署及び子育て関係団体に協力していただき、イベント・団体情報を収集します。



(2) 地域が連携したリーディングプロジェクト

平成 28 年度以降、地域が連携したリーディングプロジェクトとして、「都市コモンズ創出プロジェクト」に取り組んでいます。

【都市コモンズ創出プロジェクト（公共空間活用に向けた実証事業）】

本プロジェクトは、公共空間を積極的に活用したコミュニティづくりを進めていくための実現可能性を検証するものです。オープンカフェなど公共空間を活用した地域のイベントを支援しながら、公園や公開空地などの活用に向けた課題などを整理し、都市コモンズを創出していくものです。

IV-2. リンケージプロジェクト

本地域では、NPO 法人やボランティア団体をはじめ、様々な民間団体により、様々なコミュニティ活動が活発に行われています。そのため、行政として積極的に連携していくべき、地域が主体となったコミュニティ活動をリンケージプロジェクトと位置づけ、取組の支援を行っていきます。

IV-3. コミュニティガバナンス強化プロジェクト

マンションにおけるコミュニティの形成、そしてマンションと地域とのつながりについて、行政として取り組むべき方向性を示すとともに、その仕組みづくりに取り組んでいきます。

【町内会・自治会への行政依頼事務の検証プロジェクト】

本地域の町内会・自治会の負担を調査しながら、町内会・自治会、中原区関係各課などを含めた検討会を立ち上げ、行政の依頼事務や町内会・自治会との関わり方について検討を行います。

【住民自治組織間の連携・統合による居住者コミュニティの形成に関する検討プロジェクト】

町内会・自治会、NPO 法人、中原区により、町内会・自治会とタワーマンション間の連携や協議会等による地域のプラットフォーム形成の可能性及び行政の担うべき役割や必要な支援方策について検討します。

【マンションガバナンスの構築に関する検討プロジェクト】

NPO 法人をはじめ、中原区及び川崎市まちづくり局との連携のもと、本地域のマンションの所有者自治と居住者自治の関係性、マンション間関係性など、マンションにおけるコミュニティ形成を通して、短期的な視点及び中長期的な視点から、安定的なマンションガバナンスのあり方について検討します。

IV-4. ロードマップ

本地域は、今後、成長期（2016～2020 年）、移行期（2021～2030 年）、成熟期（2031～2040 年）の 3 つのフェーズを迎えることが予測されます。今後は、このフェーズに応じ、アクションプログラムを展開しながら、ビジョンで示した持続可能な都市を目指していきます。

現時点のアクションプログラムの概要は上記のとおりですが、積極的に地域の主体が連携し、まちを育てる関係づくりへと発展していけることを目指し、リーディングプロジェクトやコミュニティガバナンス強化プロジェクトなどに取り組んでいきます。

まちの成長期から移行期にかけては、コミュニティの連携の強化に向けた各プログラムを推進し、また、移行期から成熟期にかけては、まちの変化を捉えながら、新たな課題にも対応できるよう、地域力の向上につなげていきます。

コミュニティビジョン2040のロードマップ

